魅力発信！えひめ農業NOW

令和2年 12 月

【お知らせ】

魅力発信！えひめ農業NOWは、県ホームページ（※1）で、県下全地区の内容について、閲覧できます。

※1　掲載場所 ： ホーム ＞ 仕事・産業・観光 ＞ 農業 ＞ 農業の魅力発信
※2　この動向は、12 月中に各普及地区から報告のあったものをとりまとめたものです。

～愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課～

〒790-8570
愛媛県松山市一番町 4 丁目 4-2
（TEL） 089-912-2558
（FAX） 089-912-2564
http://www.pref.ehime.jp/noukei/

「魅力発信！えひめ農業ＮＯＷ（12 月分）」

東予地方局　地域農業育成室

■若手農業者と農業プロのマッチングを支援

○地域農業育成室は 12 月８日、若手農業者の技術力と経営管理能力の向上を目的に、若手農業者 11 人、農業プロ８人を対象に集団マッチング「若手農業者と農業プロの現地研修会」を開催し、農業プロのほ場で現地研修や農業技術及び経営に関する情報交換を行った。

○参加した若手農業者からは「栽培技術に関する不安がありベテラン農家に指導を仰ぎたい」との要望があり、農業プロからは「困ったことがあれば、いつでも相談に来てほしい」との意見が出た。

○そこで、当室は、12 月 14 日と 23 日に、栽培管理に苦慮している若手農業者と地域の農業プロとの個別マッチングを支援した。

○14 日は、若手農業者２人がベテランきゅうり農家のハウスに行き、栽培管理や資材の使用方法について質問を投げかけ、農業プロから「自分で品種比較試験をすると自分にあった品種が見つかる」等の助言をもらった。

○23 日は、アスパラガス若手農業者のハウスへ農業プロ２人が訪問し、ほ場内の排水対策について、「ユンボによる明渠の設置や水中ポンプの購入が必要」等の助言があった。

○当室は、今後も地域内の農業の担い手を育成するため、農業プロと若手農業者とのマッチング活動により、技術や経営面のサポートをしていく。

農業プロほ場での現地研修会

情報交換会

若手農業者ほ場で個別マッチング

■台湾輸出用の横野柿の出荷

○地域農業育成室は、ブランド戦略課と連携し、西条市の（株）PENTAFARM に対して、横野柿の台湾への輸出を支援しており、12 月３日に梱包作業を指導。

○台湾へ柿が届くまでに時間がかかるため、真空パック詰めを行い、12 月９日に出荷した。昨年度は軟化した果実が混じっていたため、選果を厳しく実施し、最終的に 140kg の出荷となった。

○また、昨年より軟化した果実が多かったため、当室は、脱渋方法や収穫時期、真空の度合い等を指導し、来年度は、ドライアイスや焼酎単体での脱渋や今年度より果実が青い状態での収穫を行う等の方法を実証する予定。

真空作業の様子

真空状態の横野柿

■はだか麦「ハルヒメボシ」の安定生産に向けて

○地域農業育成室は 12 月 21 日と 22 日に、ＪＡ周桑管内の５地区で、はだか麦「ハルヒメボシ」の生産者 60 人を対象に、中期栽培管理講習を実施した。

○講習会では、排水対策・土入れ・麦踏み・除草剤散布等の基本作業の徹底により、収量・品質向上を目指すよう指導した。また、現地ほ場で、土入れ・麦踏みのタイミングや葉色測定による生育診断を行い、中間追肥の的確な施用時期等を指導した。

○周桑地区の令和２年播きは、前年並みの約 660ha が作付けされており、収量 400kg/10a、全量１等を目標に高品質安定生産に向けた指導を行う。

講習の様子

ほ場での生育診断

■柿「太天」は春芽を意識したせん定が重要

○地域農業育成室は 12 月 25 日、柿の「太天」生産者 13 人に対し、せん定講習会を実施した。

○「太天」は、花は着きやすいが新梢（春芽）が発生しにくい品種であることから、新梢の確保を意識するよう伝え、新梢発生に有効な枝の長さと切り方を説明した。花が着生する結果母枝については、母枝の長さと着生する花芽数の目安、発生した芽の長さと覆われる面積を説明し、残す結果母枝の間隔がイメージしやすくなるよう指導した。

○また、苗木育成園は、樹冠拡大と充実した骨格作りに主眼を置き、春以降伸長した枝を 1/2 程度にせん定することと、近年、春季に降雨が少なく生育が不十分な樹がみられていることから、春先からのかん水の重要性を説明した。

せん定講習会の様子

東予地方局地域農業育成室　四国中央農業指導班

■四国中央市嶺南地域のこんにゃく作りを後世へ

○四国中央農業指導班は、四国中央生活研究協議会が取り組む地域の食文化や郷土料理の継承活動を支援している。

○今回、嶺南地域の各家庭で伝統的に行っている「こんにゃくづくり」を技術継承するため、同協議会の富郷グループが 12 月 13 日に取り組んだ「こんにゃくづくり活動」を記録、映像化した。

○当班は和やかな雰囲気の活動を的確に記録し、技術継承するための素材を収集したが、同協議会や同グループの会員は、食文化や郷土料理の技術継承について危機感を持っており、これらの取組の継続を求める声が挙がった。

○当班では、この活動が技術継承に限らず地域間交流の場としても期待できることから、今後ともグループの垣根を超えた地域活動として支援を継続する。

こんにゃく作りの様子

約 1m の大釜に丸めたこんにゃく玉をいれる

東予地方局　産地戦略推進室

■フラワーアレンジメントで東予地域の花木を紹介

○産地戦略推進室は12月２日、西条第二庁舎で花木フラワーアレンジメント講習会（地方局事業：新花材ピットスポラム等生産力強化事業）を開催し、管内農協及び市町担当者等12人が参加した。

○これは、フラワーアレンジメントの基本デザインや色の組合せ方等の知識や制作技術を習得することで花木を効果的にＰＲすることを目的としたもので、クリエイティブスポット花空間の野首良氏を講師に招き、基本講義と実習を行った。

○また、制作したフラワーアレンジメントは、農協、市町、県の窓口15か所に展示して花木を紹介するとともに、チラシを作成して新規栽培者の募集を行うこととしている。

講習会での実習状況

農協窓口での展示状況

東予地方局今治支局　地域農業育成室

■今治独自の「伊予美人」種芋生産及び供給システムの確立に向けて

○地域農業育成室は12月３日、ＪＡおちいまばりと「伊予美人」の安定的な高品質種芋生産及び供給について、協議を行った。

○今年度当初、当室からＪＡに農林水産研究所が開発した「親芋の副芽を利用した優良種芋大量増殖技術」の導入を提案し、(株)ファーム咲創で試験生産を行ったところ、結果は良好であった。

○今後はＪＡ全農えひめからの種芋購入を継続しつつ、毎年、全栽培面積（R30年産：30ha）に必要な種芋の５分の１※を供給し、今治地域独自の種芋生産および供給システムの確立を目指すことになった。

○令和３年度については、３月から農林水産研究所や管内農家等の優良株をもとに種苗生産に着手することとした。

※高品質安定生産のために種芋を５年に１回更新するよう生産者を促す。

協議の様子

今治地域独自の種芋生産および供給システム

■今治さといも産地の更なる拡大を支援

○地域農業育成室は12月12日、ＪＡおちいまばり営農本部会議室で、さといもの新規栽培者の掘起こしと、集落営農を中心とした規模拡大を目的に、新規栽培希望者23戸（30人）への栽培説明会を開催した。

○会では、当室から県の支援体制や今後の今治独自のさといも生産の取組を、ＪＡからさといも栽培の概要や機械リース・導入時の補助事業を説明した。

○次年度は、栽培面積30ha（Ｒ２年産：28ha)、部会員100人（現在69人）を目指し、今後も関係機関が一体となった新規栽培者への支援・指導の強化とともに更なる産地拡大を図る。

県からの支援体制等説明

説明会

■猛暑をチャンスへ。有機農業者へ温暖化を利用した野菜づくりを提言

○地域農業育成室は 12 月 14 日、今治市有機農業推進グループの勉強会で、「温暖化を利用した野菜づくり」を指導した。

○勉強会では、温暖化により、膨大なエネルギーが地上に降り注ぐことで、光合成量が増え、農産物生産量が飛躍的に増加する可能性があることを提言した。その事例として、７月上旬定植のきゅうり栽培で、９月の生産量が増大している。

○収量低下の要因である黄化えそ病が、草勢低下のバロメーターとして利用できるなど、病害発生にも意味があることを示した。

○また、害虫は温暖化のエネルギーを利用して食害、増殖を行っており、化学合成農薬だけでの防除は限界があるため、積極的な天敵の利用を呼び掛けた。

○今後、有機農業者との連携を深め、慣行農業では観察できない事象を共有し、温暖化を利用した農業を推進していく。

勉強会

黄化えそ病との共存例

■青年農業者、オンライン活用術を学ぶ

○地域農業育成室は12月11日、青年農業者４人を対象に、ＴＶ会議システム（オンライン）の活用に向け、経営支援講座を開催した。これは、新型コロナウイルス感染症の対策で、オンラインを活用してコミュニケーション能力の向上を図るために企画したもの。

○当日は、ITソリューションズ株式会社の岡本陽氏を講師に招き、ＴＶ会議システムの１つである「Zoom」を活用する方法を学んだ。参加者は、Zoom会議への参加方法や開催方法等の説明を受け自らのパソコンやスマホを利用し、画面の共有やチャット、音声コントロール等の機能を使う実習をした。また、参加者をグルーピングできるブレイクアウトルームも経験した。

○参加者は、前日にオンラインで役員会を開催しており、その経験から、ハウリングが起きた場合の対処方法やカメラワークの工夫点について質問があった。

○今後、青年農業者協議会の役員会や会員交流会のオンライン開催を支援する。

ＴＶ会議システムについて学ぶ

■ニホンザル対策を考える

○地域農業育成室は12月14日、ニホンザル対策を進めている今治市朝倉地区浅地集落で、意見交換会を開催し、地域のリーダーや猟友会員、関係機関職員の７人が参加した。

○同集落では、近年、サルの群れが目撃されることが多く、水稲や家庭菜園の野菜が被害にあっていることを受け、地域のリーダーが10月27日に同地区で開催した鳥獣害対策研修会に参加したり、11月30日に同集落に小型檻を設置するなど、鳥獣害対策の機運が高まっていることから意見交換会を開催したもの。

○当日は、当室担当者が、小型檻周辺に設置したセンサーカメラの撮影状況や現地調査の状況を報告。

○今後の対策を考えるために、最近、サルの群れを見た場所を参加者で現地確認し、当室は新たにセンサーカメラを設置してサルの出没状況を調査することとした。

サルの出没場所を地図で確認

小型檻の設置状況

現地調査の様子

■コロナ禍における地産地消活動の推進を協議

○地域農業育成室と産地戦略推進室は、12 月２日に今治支局で「第３回今治地区農産物地産地消推進緊急プロジェクトチーム会」を開催し、今治市、ＪＡおちいまばり、ＪＡ今治立花の関係者ら 13 人が参加した。

○新型コロナウイルス感染症により販売等の影響を受けた農産物について、これまでの情勢や各種支援活動について情報共有を図った。

○中でも、地元産小麦の消費拡大について、一般消費者の認知度向上を目的に新たに商品化される１ｋｇ袋の販売支援方法を協議した結果、12 月 22 日から両ＪＡで販売を始めることとなった。

○令和３年１月 22 日には今治地区農産物地産地消意見交換会を開催し、地元産農産物のＰＲ活動支援を行うことも決定した。

チーム会の様子

今治産小麦粉１ｋｇ袋

■次年度の「媛かぐや」生産・販売拡大に向けた商談支援

○地域農業育成室は、サトイモ「媛かぐや」の次年度の生産・販売拡大に向けて、新たな販売チャンネルの開拓等を協議しているところ。

○その一環として 12 月 18 日、「媛かぐや」の販売や加工品開発等に興味を示している企業（①来島開発（株）、②（株）愛媛海産）に試食の場を設けるとともにさいさいきて屋との商談支援を行った。

○その結果、両社ともに加工特性（形状、肉質、大きさ）や味（食感・香り）及びオリジナリティに対する評価は高く、①来島開発は、早速、試験的に同社が運営する道の駅のレストランで提供し、客の評価等を当室に報告するとともに、次年度は季節限定商品として青果販売も検討、②愛媛海産は、同社のレトルト炊込みご飯シリーズでの商品化を視野に試作することとなった。

○今後は、本商談のフォローアップを行うとともに、引き続き、次年度に向けた「媛かぐや」の生産振興を進める。

試食しながらの商談風景

道の駅レストラン試作品（からあげ、おでん）

■甘平の裂果対策、品質向上にかかる調査を実施

○地域農業育成室は、甘平の裂果対策と品質向上に向けた調査を実施した。

○裂果対策の調査は、①土壌水分センサーによる土壌水分の測定、②根群調査、③着果部位別の着果量調査。

①土壌水分の測定では、裂果の多い園地は裂果の少ない園地より土壌水分の増減が激しい傾向があった。

②根群調査の結果、裂果の多い園地では細根のほとんどが土壌表層に分布しており、細根量が裂果の少ない園地と比べて少ない傾向であった。

③樹を南西部及び北東部に分け着果量を確認したところ、南西部に着果が多く、午前中に日当たりがある北東部は着果量が少なかった。

○生産者からは、「根の分布を確認できた。細根が上層に分布しているので、土壌乾燥の影響を受けやすいと感じた。来年はかん水量を増やしたい」、「着果部位で着果量が異なるので、摘果方法にも反映したい」といった声があった。

○品質向上（果梗部の着色向上）の調査は“赤色笠掛けシート”の現地実証試験を実施し、シート被覆はサンテ被覆と同等の効果があることを確認した。

○当室は１月末までに結果を取りまとめ、２月に栽培指針を作成し、高品質安定生産を目指して指導していく。

根群調査

赤色笠掛けシート被覆の様子

今治支局地域農業育成室　しまなみ農業指導班

■新規就農者を対象に果樹園の巡回相談会を開催

○しまなみ農業指導班は、12 月 8 日に今治市大三島でかんきつ栽培に取り組む新規就農者（次世代人材投資事業経営開始型の受給者）６人に対し、園地巡回相談会を開催した。
○当日は、新規就農者のほ場で地域農業育成室の職員が就農後の課題等を聞き、品種別にアドバイスや栽培技術、作業性の改善等について指導を行った。
○参加した新規就農者は「どうやって園地の若返りをすればよいのか見当がつかなかったのでとても参考になった。引き続き指導してもらいたい。」と語った。
○当班は新規就農者の栽培技術の向上と作業の能率を考えた園地づくりを進め、新規就農者の定着と経営安定を図っていく。

品種にあった剪定方法を学ぶ

園内作業道の入れ方を学ぶ

■しまなみＧＴ設立 20 周年記念イベントを開催

○しまなみ農業指導班は、12 月５日と 12 日に、しまなみグリーン・ツーリズム推進協議会が今治市・上島町の４島（７体験）で開催した、設立 20 周年記念イベント「ワンコイン 500 円体験」を支援した。
○今回のイベントは、当班指導の下、新型コロナウイルス対策として新たに導入した事業「県内観光促進プロモーション支援事業」の一環で実施したもの。
○体験に参加した子どもたち（172 人）からは、「楽しかった。また、イベントをやってほしい。」などの感想が寄せられた。また、体験指導者らは「久しぶりに元気な子どもたちの声が聞けてやる気が出た。」とイベントの成功を喜んだ。
○当班では、今後も教育旅行受入等の協議会活動に対して「新型コロナウイルス感染防止対策」を徹底するとともに、しまなみ地域の活性化につながる取組となるよう支援していく。

石窯を使ったピザづくり体験

東予地方局今治支局　産地戦略推進室

■日本オリーブオイルソムリエ協会、しまなみ産オリーブ栽培を指導

○産地戦略推進室は 12 月 3 日、しまなみ地域で進めているオリーブ産地育成活動の一環で、一般社団法人日本オリーブオイルソムリエ協会（東京都、理事長：多田俊哉）※と連携し、地元の生産者グループを対象に研修会を開催した。

○当日は、同協会の多田理事長から、国内におけるオリーブオイルの情勢報告を皮切りに、参加者全員で、高品質なオイル製造に向けて意見交換を行い、しまなみ産オリーブオイルの課題について共有を図った。

○また、同協会と当室の普及指導員が現地栽培ほ場で、品種別の栽培ポイントや冬期管理について技術指導した。

意見交換の様子

栽培管理指導を受けている様子

※【一般社団法人日本オリーブオイルソムリエ協会】
　平成 17 年創設。オリーブオイルの普及・啓蒙を目的としており、オリーブオイルソムリエの育成活動等を行う。

中予地方局　地域農業育成室

■松山市担い手農家育成研修で就農支援

○地域農業育成室は12月9日、松山市が主催する松山市担い手農家育成研修で、就農希望者10人の就農を支援した。

○これは、同市が本格的に就農を希望する市民を対象に、実習と座学により就農に必要な知識や技術の習得を支援する研修制度で、当室は「かんきつの病害虫の特徴と防除」、「野菜の病害虫及び生理障害の診断と対策」、「経営管理の基本」について講義した。

○今後は、就農相談カードで関係機関と情報を共有しながら就農・定着を支援する。

研修会の様子

■樹園地再編整備後の営農支援を見据えた先進調査

○地域農業育成室は12月15日、松山市及びＪＡえひめ中央、県中予地方局農村整備第一・第二課と連携して「松山地区災害復興・樹園地再編ワーキングチーム」を開催し、今治市菊間町のかんきつマルドリ栽培を調査した。

○同町では、団地型かんきつマルドリ栽培に取り組んでおり、高品質の愛媛果試第28号を栽培するため、限られた水を有効に活用するシステムや営農支援状況を調査し、今後、農地中間管理機構関連事業を活用した松山市下難波地区の園地整備や営農支援の参考とした。

○管内では、各地区でかんきつ園の基盤整備が順次計画されており、関係機関が連携して、担い手への農地集積と早期成園化、施設化推進による収益向上を目指す。

園地条件やマルドリ栽培について意見交換

■樹園地再編整備で産地の収益力を強化

○地域農業育成室は 12 月 17 日、県中予地方局農村整備第二課と連携し、農地中間管理機構関連事業が実施される松山市浅海原地区で営農部会を開催した。
○同地区では、農地の基盤整備により「愛媛果試第 28 号等の商品価値の高いブランド品種の導入」と「担い手への農地集積・集約化」を図り、「儲かる農業」の実現を目指している。
○会では、集積・集約化が図られた農地で施設整備を行い、「愛媛果試第 28 号」や「せとか」等の栽培に取り組むことを確認した。
○当室は、今後も「松山地区災害復興・樹園地再編ワーキングチーム」で、関係機関と連携し儲かる柑橘経営モデルの実現を目指す。

■愛媛果試第 28 号の品評会で、青年農業者が技術を競う！

○地域農業育成室は 12 月 19 日、松山市青年農業者連絡協議会、松山市と連携し、愛媛果試第 28 号の果実品評会を開催した。
○これは、同協議会のプロジェクト活動の一環として例年、愛媛果試第 28 号の試食イベントを実施していたが、コロナ禍を鑑み、青年農業者らの同品種の品質向上に対する士気を高めるために実施したもの。
○会には、会員 15 人から果実が出品され、糖度・外観等の果実品質を、先輩農家やＪＡ等が審査員となり評価した。

厳正な審査を行う審査員

○参加者からは、「互いの果実を競う機会は無いので、良い機会になった」、「栽培管理の情報を共有することができた」との声が聞かれ、前向きな活動となった。

中予地方局地域農業育成室　伊予農業指導班

■スクミリンゴガイ対策の実証ほ設置に向けて集落営農組織とヒアリング

○伊予農業指導班は 12 月 7 日～18 日、水稲の苗を食害する「スクミリンゴガイ」対策のため、管内の集落営農組織（9 組織）に対し、被害状況の調査や被害防止対策実証ほの設置についてヒアリングを実施した。

○これは、11 月 20 日に集落営農組織を対象とした「スクミリンゴガイ」対策の研修会で、自らの農地で対策の実証に協力したいと多数の意向があったことから実施したもの。

実証ほの聞き取りの様子

○今後は、ヒアリングの結果を取りまとめ、水稲と裸麦の二毛作が主体の管内では、一般的な対策である冬季の耕起と石灰窒素による防除対策が困難なことから、農機具メーカーや農薬メーカーと連携しながら、有効な防除方法の確立に取り組む。

■青年農業者が農業機械の知識を高める

○伊予農業指導班は 12 月 14 日、ＪＡえひめ中央南部農機センターで、農業機械研修会を開催し、伊予地区青年農業者協議会員８人が農業機械の安全使用について学んだ。

○会では、同ＪＡの職員が、草刈機と動力噴霧機の使用前後の点検及びトラブル時の対処方法を説明した。

○また、青年農業者が草刈機等を持参し、より具体的なメンテナンス方法やエンジン不具合の対処方法等についての指導を受け、参加者からは有意義な研修になったと好評であった。

研修を受ける青年農業者

■中山栗の高収量・高品質化を目指し低樹高剪定を！

○伊予農業指導班は 12 月４日と５日、中山栗の高収量・高品質化を目指して剪定講習会を開催し、中山町農業者協議会員を中心に栽培者 73 人が参加した。

○これは、局予算事業「中山栗産地力向上促進事業」の一環で、平成 30 年度から西予市城川町の剪定の匠を講師に迎え、毎年同じ園地で、カットバック剪定により、３～５年をかけて徐々に低樹高化を図る技術を推進している。農家からは「３年かけ樹高が下がり、下部で葉が充実するのが観察できた」といった声が聞かれ、剪定の成果を実感していた。

栗剪定講習会の様子

○同協議会には、地区内の栗剪定作業を受託する下部組織があり、今期は約 46ha の面積を請け負う予定で、栗園の低樹高化が着実に波及している。

■認定農業者、地域の担い手育成と夢のある農業経営を学ぶ

○伊予農業指導班は 12 月 17 日、ウェルピア伊予で、松山市「いちごファーム北条」の安田豊氏を講師に招き、「伊予地区農業研修会」を開催。管内の認定農業者夫妻や家族経営協定締結者等 28 人が、担い手育成や観光農園の経営について学んだ。

○新規就農者は農地や技術がないことが就農時の障害となっていることから、同氏は、自らの農園で研修生の受け入れや技術習得を支援している。

○また、同氏は農家と農業でアルバイトをしたい人をつなぐマッチングサービスを利用しており、参加者からは、今後の労働力の確保として同サービスを利用してみたいとの声があった。

講演の様子

中予地方局地域農業育成室　久万高原農業指導班

■売れる久万高原産の漬物づくりを目指して

○久万高原農業指導班は12月８日、第１回漬物新商品開発講習会を久万高原町美川地区で開催し、漬物開発に興味を持つ農業者ら13人が参加した。

○これは、局予算「久万高原の漬物向け野菜産地再興事業」の一環で、漬物の新商品開発を目指しているもの。

○会では、松山東雲短期大学名誉教授の大塚暢幸氏を講師に招き、減塩漬物の製造技術を習得し、塩や酢の種類によって漬物の風味が変化することを確認した。

講習会の様子

○参加者からは、「今まで自己流でやっていたので勉強になった」、「バルサミコ酢を使ったのは初めてで試してみたい」等の感想があり、漬物の新商品づくりへの意欲を高めた。

■雑穀の新たな活用法を学ぶ

○久万高原農業指導班は12月２日、農業大学校と連携し、農業経営者協議会女性部「耕楽」のメンバー８人を対象に、特産品開発講座を開催した。

○会では、峰島遊学舎の鳥越聖代氏の指導により、「たかきびとゴボウ＆５種野菜のキーマカレー」と、久万高原町産のりんごを皮ごと使用した「はだか麦粉のりんご花びらパイ」を調理実習した。

○参加者からは、「たかきびのプチプチ感がいい」、「雑穀の食べ方はあまり知らなかったが、日々の食事の中に取り入れたい」との声が聞かれた。

講師から調理法を学ぶ参加者ら

○久万高原町では昔から「たかきび」や「こきび」などの雑穀が栽培されていたが、近年高齢化等により栽培者が少なくなっていることから、当班では食文化の伝承活動などを引き続き支援する。

※農業経営者協議会女性部「耕楽」（こうらく）･･･久万高原町内の認定農業者の女性12人で構成された組織。

■久万高原町の「人・農地プラン」策定（実質化）推進中！

○久万高原農業指導班は12月11日以降、久万高原町で集落単位の「人・農地プラン」を推進するため、各集落で座談会等を開催しており、担い手への農地集積など今後の営農の在り方について提案している。

○同町父二峰地区橋詰集落では、人・農地プラン検討会の推進委員（５人）が、個別訪問により全地権者の意向調査を11月末までに終えた。その結果をもとに集落座談会で今後の在り方を協議し、同集落の自治会内に「担い手チーム(仮称)」（８人）を設置して、今後増加が見込まれる耕作者不在の農地の管理を担うこととした。

○今後は、農作業を委託したい農地を地図に明記し、同チームで随時農作業を展開するとともに規約の策定を進める。

○当班は、同集落の取組事例を他集落にも紹介し、同プランの実質化に向け支援する。

意向調査結果をもとに協議する推進委員

■集落ぐるみの防護柵設置で集落の農業を守る

○久万高原農業指導班は農閑期の冬季に、イノシシによる農作物の被害防止のため、各集落で防護柵（ワイヤーメッシュ）の設置等による対策を指導している。

○久万高原町直瀬地区永子集落では、防護柵（ワイヤーメッシュ）を総延長3,870m、同地区下沖集落では、総延長2,310mの防護柵の設置を指導し、３月末までの完成を目指している。

○当班では、各集落での整備状況を確認し、設置に不備がないか巡回指導を実施する。

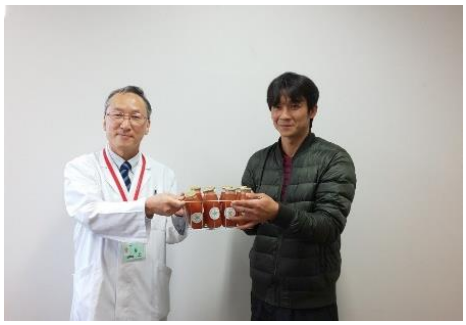
集落ぐるみで防護柵設置の実地研修

■青年農業者協議会が医療従事者にトマトジュース贈呈

○久万高原農業指導班が活動を支援する久万高原町青年農業者連絡協議会は 12 月 24 日、新型コロナウイルスの指定医療機関である県立中央病院に同会員が栽培したトマトを使ったジュースを提供した。

○これは、同協議会から当班へ「新型コロナウィルスの医療機関として最前線で頑張っている医療従事者に何か支援できないか」との相談があり実現したもの。

○贈呈式では、同協議会長が「自分たちの想いを込めたトマトジュースを飲んで、ホッと息抜きして欲しい」と述べ、菅院長からは「栄養満点のトマトジュースは職員も喜ぶ」と感謝の言葉が述べられた。



トマトジュース贈呈式（右：森会長）

贈呈したトマトジュース

中予地方局　産地戦略推進室

■「さくらひめ」の早期電照開始により生育・開花が促進

○産地戦略推進室は、さくらひめ生産者の所得向上に向け、高値が期待される時期に出荷ピークを合わせた栽培管理や、生育促進により３番花までの確実な採花を行い、収量の向上に繋げる栽培技術を検討している。

○９月定植の促成栽培において、通常 12 月から開始する電照を１か月程度早め、10 月下旬と 11 月上旬にそれぞれ開始した農家では、より早く電照を開始した区でさらに生育が早まり、12 月上旬からの採花が確認された。切り花の品質も、長さ 80～90cm 程度の高品質なものが収穫されている。

○当室では、引き続き生育経過の確認と併せ、需要期の３月下旬に２番花を採花できるよう、１番花採花後の肥培管理の徹底を指導する。

「さくらひめ」の採花状況（12/22 現在）
左：10 月下旬電照開始、右：11 月上旬電照開始
（※左の方が採花が進み、収穫が終盤となっている）

■「甘平」の裂果と根の分布状況との関連を調査

○産地戦略推進室は、「甘平」の裂果対策の一環で、管内の５農家６園地で樹冠下部の土壌を掘り取り、根の分布状況と夏季に収集した裂果率のデータとの関連を調査した。

○このうち、生産者が同じかん水管理を行っているにも拘らず、裂果率が異なる２ヶ所の園地の根群を比較したところ、裂果の少ない園地では土壌の深層まで根群が分布していたのに対し、裂果の多い土壌では深層にほとんど根が伸長しておらず、表層近くの浅い部分に集中していることが確認された。

○生産者からは、「これまでは一律のかん水管理を行ってきたが、園地の状況に合わせたかん水を行う必要がある」、「来年は裂果の多い園地ではかん水の頻度を多くし、土壌表面の水分を保つようにしたい」との話があった。

○管内には、根が表層に多くても多頻度かん水によって裂果率を低く抑えている園地もあることから、当室では引き続き農産園芸課と連携し、園地条件に応じた適切なかん水管理を指導し裂果の軽減に取り組む。

根群調査の様子

地下 15～30cm の根の状況
（左：裂果率低　右：裂果率高）

■若手普及職員が中予管内の産直市を訪問調査
○地域農業育成室及び産地戦略推進室は、12 月から若手普及職員（８人）に対して出口戦略を見据えた産地づくりや流通･販売に関するスキルの向上を図るため、若手の自主的な勉強会「ＳＴ会」※活動の一環として管内の主な産直市（13 施設）を訪問し、現状や課題等を調査している。 ○これは、８月 11 日に開催された「第１回中予地方局地域政策懇談会」で、委員からコロナ禍の中「産直市で余剰になった農産物の活用推進」や「産直市の情報発信強化」についての提言を受け実施しているもの。 ○今後は調査結果を踏まえ、産直市と連携した新たな施策や普及活動の展開を検討する。 **※ＳＴ会：Steal Technique の略で、中予地方局の若手普及職員が、現場の第一線で農業者から信頼される普及指導員を目指し、先輩普及職員の技術や知識を習得する研修会。**

南予地方局　地域農業育成室

■宇和島市生活研究協議会が吉田中学校で出前講座を開催

○地域農業育成室は 12 月 7 日、宇和島市生活研究協議会吉田支部（兵頭百合子会長）と連携し、宇和島市立吉田中学校で、同校１年生 21 人を対象に「食文化普及講座」を開催した。

○これまで、新型コロナウイルスの感染拡大の影響から講座開催を見合わせていたが、感染防止対策を講じた上で、同協議会が作成した郷土料理動画を活用しながら、宇和島市の農業の学習や吉田町の郷土料理の「ふくめん」と「吉田コロッケ」の伝承に取り組んだ。

郷土料理のコツを教える協議会員

○実習後の意見交換では、「郷土料理について理解できた（85%）」「郷土料理に興味がわいた（76%）」「吉田コロッケを初めて食べた（57%）」との声があり、郷土料理等への認識を深めることができた。

○当室は引き続き、「愛媛のふるさとごはん※」に掲載されている南予の郷土料理を県内外に広めるため“郷土料理の伝承動画”を作成し、料理名人の技の保存・伝承活動に取り組む。

※愛媛のふるさとごはん：愛媛県農山漁村生活研究協議会が 2007 年 3 月に発刊し、郷土レシピ 153 点を収録した郷土料理本

南予地方局地域農業育成室　鬼北農業指導班

■松野町で人・農地プランの説明会を開催。１集落で集落営農に向けて支援

○鬼北農業指導班は 11 月中旬から松野町と連携して、「地域の農業の未来に関する話合い」と銘打った「人・農地プラン」の説明会を町内 10 集落で順次開催し、集落の区長や農業委員、認定農業者らが参加して集落における将来の農業像について協議した。

○その結果、「富岡集落」が集落営農に強い関心を示したことから、12 月 9 日に集落の代表者らと話し合いを行い、今後、集落で将来の営農について検討を進めることとなった。

地図を見ながら農地の状況確認

○当班は引き続き、関係機関と連携し、集落活動の体制を整え、集落合意に基づく組織的な営農活動に向け支援する。

■鬼北スイーツ開発プロジェクト第３回講座を実施。北宇和高校生と連携を深める

○鬼北農業指導班は 12 月 12 日、鬼北地区生活研究協議員を対象に北宇和高等学校生産食品科と連携して「鬼北スイーツ開発プロジェクト第３回講座」を開催し、22 人が参加した。

○これは、加工品開発の手法を研究し農村女性の起業活動を支援するとともに、鬼北地区関係者とのコラボレーションにより、会員数が減少しつつある協議会活動の活性化を図るもので、今回は、北宇和高等学校生産食品科の３年生２人を講師として、「酒まんじゅう」・「かるかん」の加工研修を実施した。

○参加者からは、「和菓子の加工品には非常に興味があり勉強になった」「販売している加工品に応用できないか試作してみたい」等の声が聞かれた。

○教諭からも「生徒に対しても貴重な経験になるため、次年度以降もぜひ続けたい」との声があり、当班は引き続き、北宇和高校と連携して商品開発や協議会活動を支援する。

講座の様子

試作した酒まんじゅう

■鬼北地域の抑制きゅうり品種が調査を経て 15 年ぶりに決定

○鬼北農業指導班は 12 月 17 日、きゅうり産地の再興に向けた取組の一つとして、全作型（半促成・露地・抑制）きゅうりの品種試験結果報告会を開催し、生産者 20 人が参加した。

○鬼北地域（松野町、鬼北町）では、15 年前の古い品種が中心に栽培されていることから、耐病性の低下等が問題となっており、品種の更新が急務となっている。

○会では、県内の各作型で導入されている品種を中心に、当班が調査した生育状況や収量性、病害発生等の状況、赤色防虫ネットと光反射シートによる害虫の侵入抑制結果等を説明した。

きゅうり品種結果報告会の様子

○その結果、抑制きゅうりでは有望な２品種を選定し、今後更新を進めることとなり、半促成・露地については、引き続き品種調査を行うこととなった。

○当班は引き続き、有望品種の選定、研修ハウスを利用した新規栽培者の確保、遊休ハウスの利用促進、単価の良い７月以降定植の栽培面積の拡大、共選共販での労働時間短縮による生産規模の拡大などに取り組み、出荷金額１億円の産地を目指す。

■キウイフルーツ花粉ビジネス（雄樹）の剪定講習会を開催

○鬼北農業指導班は 12 月 22 日、松野町で取り組んでいる「キウイフルーツ花粉ビジネス」の一環で、果樹研究センターと連携して生産者３戸の園地を巡回しながら、「雄樹」の剪定講習会を開催した。

○当日は、各園地で、当班及び果樹研究センターの職員が剪定方法について実演を交えて説明し、生産者は、職員のアドバイスを受けながら実際に剪定を行った。

○参加者からは、「枝の配置で剪定のし易さが変わることが分かった」「実際にやっているうちに切る位置が分かるようになってきた」等の感想があり、剪定の手順やコツについて理解を深めた。

○当班は、より樹形が複雑になる来年以降も、引き続き講習会を開催し、花粉の安定生産に向けた栽培指導を行う。

剪定指導の様子

アドバイスを受け剪定を行う生産者

南予地方局地域農業育成室　愛南農業指導班

■農業用貯水池のアオコ低減実証プロジェクトはじまる～水は抜かずに清浄化～

○愛南農業指導班は 12 月 21 日、地区青年農業者協議会（向田会長、24 人）を対象に「青年農業者ステップアップ活動支援事業」を活用し、町内の農業用ため池で「アオコ低減実証」プロジェクト活動を開始した。

○近年、当管内のため池では、水温上昇が富栄養化やアオコの発生を増大させ、水源ポンプが詰まるなどの問題が発生している。

○そこで、植物プランクトンなどの増殖を抑え、水質浄化機能があるとされる「植生浮島」を、協議会員が資材を持ち寄り制作・設置し、水質浄化効果を確認することとした。

○当班は、将来のリーダーとなる青年農業者の育成を目指し、プロジェクト活動を通して会員の自主性を引き出しながら、継続した支援を行う。

植生浮島を農業用貯水池に設置

南予地方局　産地戦略推進室

■コロナ禍における新しい生活様式に対応したイベント「第３回南予マルシェ」を開催

○南予地方局と八幡浜支局の産地戦略推進室は 12 月 15 日、宇和島恵美須町商店街で「第３回南予マルシェ」を開催。

○今回は、「道の駅みま」「道の駅清流の里ひじかわ」「道の駅虹の森公園まつの」の３施設に加え、北宇和高等学校が参加し、トマトやハクサイなどの旬の野菜に加え、地元農産物を使ったユズマーマレード、イチゴジャムなどを販売した。

○当日は、寒波の影響により来場者は少なかったものの、これまでの開催で掴んだ多くの固定客が列をなして、新鮮な野菜などを買い求めた。特に、北宇和高等学校のジャム等はまとめ買いする人も多く好評であった。

○第４回は１月８日、八幡浜新町商店街の「八日市」で試行的に開催する予定で、引き続きコロナ禍での新しい生活様式に対応したイベント構築に取り組みながら、地域農産物の販売促進に努める。

野菜の購入に列をつくる買物客

高校生によるジャム、プリン等の販売

■松野町産うめを使用した「まるごと松野ピザ」が販売開始

○産地戦略推進室は、うめ産地松野町の再興に向けた取組の一環で、うめ加工品の開発を支援している。

○今回、当室の働きかけにより、道の駅虹の森公園まつのが、うめを使ったピザづくりに取り組み、１か月の試作期間を経て商品が完成した。

○ソースや具材にはうめを使用するほか、町内産の野菜もふんだんにトッピングした「まるごと松野ピザ」（税込み：1,500 円）として、12 月上旬から森の国ファームで販売している。

販売開始した「まるごと松野ピザ」

○当室では、今後も新たな加工品開発を支援するとともに、完成した加工品のＰＲに取り組む。

南予地方局八幡浜支局　地域農業育成室

■温州みかん収穫、例年以上に労働力を確保して順調に終了！

○地域農業育成室は、新型コロナウイルス感染症の影響により、県外アルバイターによるみかん収穫の労働力確保が困難になると想定されたことから、西宇和みかん支援隊(構成員：県・市・町・ＪＡ)と連携して十分な労働力が確保できるよう、準備を進めてきた。

○コロナ対策として「西宇和版新型コロナウイルス感染予防に係るガイドライン」を策定するとともに、県・市・町の補助事業等を活用して、感染防止対策とアルバイター及びお手伝いプロジェクト有償ボランティアを確保するなど、幅広い労働力確保活動を強化した。

○こうした中、今年の雇用労働者による温州みかん収穫は10月27日から始まり、天候に恵まれるとともに、心配されていた労働力も十分に確保できたことから、例年より約5日早い12月25日に終了した。

○なお、期間中の労働力は、県外アルバイター483人、県内アルバイター110人、お手伝いプロジェクトワーカー登録者454人（うち新規登録者165人）と例年以上に確保できた。

○今後もガイドラインを遵守し、感染予防対策を実施しながら中晩柑収穫の労働力確保を支援する。

マスクを着けて段取りよく収穫作業をするアルバイター

今年も産地の大きな戦力となった県外アルバイター

■落葉果樹剪定技術の向上を目指して

○地域農業育成室は12月25日、ＪＡにしうわと連携しキウイフルーツと富士柿の剪定技術研修会を実施し、関係機関・団体の関係者ら18人が参加。

○研修会は、ＪＡ営農指導員等の整枝・剪定技術を向上させ、生産者への適切な指導により、落葉果樹の高品質生産につなげることを目的に実施。

○当日は、当室から整枝・剪定のポイントを説明するとともに、モデルとなる剪定手法を実演し、その後、参加者が実習して技術の習得に励んだ。

○参加者からは、「生産者への指導に役立てたい」、「継続して実施してほしい」との声が多数あり、今後も栽培技術に関する研修会を開催するなど、指導員の技術力向上に取り組む。

参加者らによるキウイフルーツの剪定実習

富士柿の剪定のポイントを説明

南予地方局八幡浜支局地域農業育成室　大洲農業指導班

■消費者に安全安心な農産物を提供するために

○大洲農業指導班は 12 月 11 日、内子町農村支援センター及びうちこフレッシュパークからりと共に農産物出荷者 40 人を個別訪問し、園地巡回と併せて栽培履歴記帳及び農薬保管状況等を確認した。

○消費者が安心して農産物を購入できるよう生産履歴情報を開示・提供し、円滑な生産履歴の記帳や適切な農薬保管と使用、環境保全型農業の展開と食の安全確保を促進することを目的に実施。

○防除の日時・対象病害虫の記帳はあるものの農薬名・使用量の記載がない、農薬保管庫はあるが鍵がかからないなどの不備な点に対して、適切に記帳することや鍵付き農薬保管庫の設置を指導するとともに農薬は必要な量を購入し、できるだけその年で使い切ること等の具体的アドバイスを行った。

○今回確認した事項は、安全安心な農産物提供への意識を高めるため、適切な点・改善する点を具体的に提示して農産物出荷者へ通知する。

栽培履歴を確認

適切に管理された園地

■生産者と消費者をつなぐメディア「アグルビト」を立ち上げ！

○大洲農業指導班は、大洲市青年農業者協議会（会長：村上隆志、会員 16 名）が取り組む、生産者と消費者をつなぐメディア「アグルビト」の立ち上げや SNS（Facebook、Instagram）の運用開始、協議会を取り上げた冊子（創刊号）の作成について支援を行った。

○同協議会では例年、食育活動やイベント出店などを通じ、消費者との対面・体験による農の魅力発信や農産物ＰＲを行ってきたが、今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で活動が縮小。そこで、コロナ禍でもできる活動を模索し、薄れつつある消費者との繋がりを再構築する目的で本活動に至った。

○当班は 12 月 12 日、「アグルビト」を幅広く周知するため産直市「愛たい菜」で冊子の創刊号配布イベントの企画・支援を実施。当日は、新型コロナウイルス感染対策を十分に講じ、店頭で 200 部の配布を行った。

○２月には、第２号の発刊を予定しており、年間３回程度の発刊を計画。今後は、各会員にスポットを当てた日々の農作業や旬の作物、農家レシピ紹介などに加え、農産物のプレゼント企画も盛り込むなど、随時発信できる SNS を最大限活用し、今までになかった形で地元農産物のＰＲ活動を展開していく。

消費者に「アグルビト」を配布する青年農業者

Facebook の QR コード

■冷蔵シャインマスカット、出来は上々

○大洲農業指導班は12月17、21、23日の３日間、ＪＡ愛媛たいきぶどう部会とともに、冬季販売用冷蔵シャインマスカットの鮮度保持状況を検査。これは９月に収穫し（３回、929 kg/1,455房)、フレッシュホルダーで給水しながら１℃で冷蔵貯蔵していたもの。

○冷蔵庫から搬出した果実は一房ずつ、果粒の張り具合、腐敗果やアタリ果等の有無・発生程度を確認。貯蔵期間中のロスは５％（昨年15%）で、出荷量は計879 kgとなり（H30年：427 kg、Ｒ元年：541 kg)、全て県内スーパーで販売される。

○今年度、当班では販売店舗の店頭で冷蔵シャインマスカットの消費者ニーズ調査を予定していたが、コロナ禍により中止。代わりに、民間企業や銀行等を対象にした個別訪問（12月22～23日）による試食及びＷＥＢアンケート調査を実施（12月28日時点で237名回答)。

○今後、冷蔵シャインマスカットに係るコスト試算やアンケート結果を検証し、農家所得増加につながる集荷体制や販売手法などの提案を行っていく。

鮮度状況確認及び出荷調製作業

WEBアンケート（Googleフォーム利用）

南予地方局八幡浜支局地域農業育成室　西予農業指導班

■いちご病害虫総合防除体系の現地実証による技術普及が前進

○西予農業指導班は、いちごのハダニ対策として天敵の活用を推進しており、より効果的な放飼体系を検討するため、「ミヤコカブリダニ（バンカーシート）」と「チリカブリダニ」を同時放飼する実証を行っている。

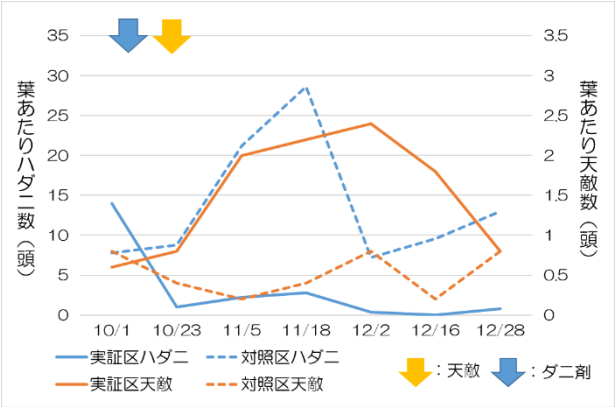
○ゼロ放飼（ハダニの発生がない状態で天敵を放飼）を行うために事前に天敵への影響が少ない薬剤で防除し、10 月 23 日に天敵を放飼した（実証区：「バンカーシート」＋「チリカブリダニ」、対照区：「バンカーシート」のみ）。

○ハダニの発生は、実証区でほとんど見られないものの、対照区でスポット発生しており、その後増加した天敵により抑制されている。

○実証区では、「バンカーシート」から天敵が放出されるまでに２週間ほど要するため、その間に発生したハダニを「チリカブリダニ」が抑制したことによると考えられる。

○今後、調査を継続するとともに、今年度から新たに天敵導入したほ場の状況を確認し、地域に適した放飼方法のマニュアル化を進める。

ハダニ・天敵頭数の調査



葉あたりのハダニ・天敵頭数の推移

■農福連携による冬至用かぼちゃの出荷箱折り作業に従事

○西予農業指導班は、担い手の労働力を補完するため農福連携を推進しており、農事組合法人「加茂ファーム」が冬至用に出荷するかぼちゃについて、市内の就労継続支援施設が 12 月９日から３日間、1,500 個の出荷箱折り作業に従事した。

○作業に従事した施設利用者と支援員からは、「箱折りやテープ張りに少し力が要ったが、みんなで分担して効率よくできた。役に立てて嬉しい。」といった声があった。また、依頼した同法人は「急な作業依頼にも関わらず、直ぐに対応してもらって助かった。」と安堵していた。

○当班では、今後も農福連携による農作業マッチングを支援し、労働力確保と施設利用者の就労機会の創出につなげていく。

農福連携による出荷箱折り作業

■地元中学生へ地域の食文化を伝承！

○西予農業指導班は 12 月 14 日、明浜中学校の生徒６人を対象に、明浜町生活研究会会員を講師に招き、鯛めしやみかんもちなどの食文化普及講座を開催した。

○これは、農産加工技術や地域の食文化に詳しい西予生活研究協議会会員が講師となり、食農教育の推進を図るもの。

○生徒からは、調理方法や食材への質問が挙がるなど積極的な交流が図られるとともに「どれも美味しかったので家で作ってみたい」といった感想が挙がり好評であった。

○当班からは、当地域特産である柑橘栽培の歴史や県内で栽培される品種等を紹介し、生徒が柑橘の品種の多さに驚く様子が伺えた。

調理技術の伝承

普及職員による柑橘の紹介

■大野ヶ原産にんにくの産地化に向けて

○西予農業指導班は、西予市大野ヶ原で寒地系にんにく「ホワイト６片種」の産地化を支援しており、今年５月に設立した「大野ヶ原にんにく組合」と今後の栽培・加工計画を検討した。

○栽培技術の確立に向けて当班が 10 月に設置した実証ほについて、透明マルチの被覆と除草剤の散布を行う試験区が、対象区の黒マルチ被覆より定植後の生育が優れていることを確認した。

○同組合では、10 月までに 12 戸の農家が約 65 a 植付けている。

○また、にんにくの活用法を検証するため、県内シェフや加工業者へ調理・加工を依頼したところ、「熟成にんにく」や「パウダー」は評価が高く、多くの需要が期待される。

○組合員からは「栽培技術を確立することで安定生産が見込まれ、収益につなげていきたい」「売り先や活用法の目途が立つことで、安心して栽培できる」といった声が上がった。

○当班は、同組合と連携し、植付け方法や適正施肥管理、病害虫防除など安定生産に向けた栽培技術を確立するとともに、新たな加工や食べ方の試作・提案を行い、販売まで見据えた産地化に向けて支援していく。

技術実証ほの設置
（左：透明マルチ、右：黒マルチ）

熟成にんにくを活用した料理

南予地方局八幡浜支局　産地戦略推進室

■加工用青ネギの産地化に向けて情報共有を図る

○産地戦略推進室は12月４日、西予農業指導班と連携して加工用青ネギ生産推進会議を開催し、生産・販売を一元的に担う(株)百姓百品村の担当者２人と契約農家７人及び西予市、農林水産研究所の関係職員が参加。

○当日は、同社が今年の生産・販売状況を報告。当室及び同班からは安定育苗に向けた技術実証内容と生産拡大が見込まれる西予市野村町太田、権現地区の農地中間管理事業による基盤整備の状況について説明し、産地化に向けての課題と今後の方策について情報を共有した。

○また、生産農家からの定植後の施肥管理や病害虫防除等の質問に対し、技術対策をアドバイスするとともに、育苗ハウスで、培土の違いによる苗の生育状況を確認しながら、適切な育苗管理について検討した。

○当室は、加工用青ネギの需要に応じた安定生産を実現するため、安定育苗技術の確立を図るとともに、機械化による収穫作業の省力化等にも取り組みながら、引き続き加工用青ネギの産地化を推進していく。

加工用青ネギの栽培について意見交換

培土の違いによる苗の生育状況を確認

■甘平の台湾輸出について最終確認

○産地戦略推進室は12月２日、ブランド戦略課、ＪＡにしうわと、甘平（施設栽培）の台湾輸出について最終打合せを行った。

○輸出は、１月22～24日に現地で開催される「愛媛フェア」に合わせて計画しており、それに向けての選果日、数量、価格、輸送方法等について協議するとともに、生産者３人に対する輸出果実の農薬分析と防除履歴の提出等について、日程調整を行った。

○本年は産地からの要望により、取扱い等級の規格を見直し、約2.5ｔ（Ｒ元年産：2.0ｔ）が１月12～21日にかけて、輸出業者である(株)裕源等を通じて、航空便と船便で輸出される。

本年産甘平の輸出について検討

○当室は関係機関と連携して甘平の海外輸出を支援し、新たな販路としての定着とブランド力の強化を目指す。

■たいき産冷蔵富有柿　香港へ輸出

○産地戦略推進室が支援しているＪＡ愛媛たいきの冷蔵富有柿２ｔが、12 月 16、17 日に香港へ輸出された。

○昨年は、刀根早生及び富有柿も輸出していたが、本年は、産地の生産状況や国内の販売状況を考慮して、現地で和歌山産と競合する刀根早生の輸出は見送り、冷蔵富有柿に絞って実施した。

○昨年の冷蔵富有柿は2L・3L サイズを２ｔ輸出したのに対して、今年産は夏季の干ばつの影響で全体的に小玉であったことから、全て2L サイズで取り組んだものの、輸出業者のグローウェルジャパン㈱からの品質評価は高かった。

輸出された冷蔵富有柿（個装）
この後、段ボールに詰められる

○当室では来年以降も継続できるよう関係機関と連携し、輸出に関する産地の取組支援と情報提供に努める。

■八幡浜での認知度向上のためフィンガーライムと地元食材とのコラボを検討！

○産地戦略推進室は 12 月８日、八幡浜市内飲食店でフィンガーライム食材活用検討会を開催し、生産者で組織するフィンガーライム産地化推進協議会役員及び飲食店経営者ら５人が参加。

○管内では本年度、事業を活用して５戸が７棟、14ａでハウスを整備する予定で、今後、増産が見込まれていることから、高級感を醸し出す食材としての販売先と活用法の検討が急務となっている。

○そこで、コロナ禍にあり首都圏でのＰＲ活動が難しいこともあって、産地化を進めている八幡浜での認知度向上のため、骨をそぎ取る新技法で注目されている地元食材の鱧（ハモ）料理での活用について検討した。

○意見交換の中で、「鱧などの白身魚の刺身やカルパッチョ等、透明感のある料理に添えると彩りが引き立つ」「山椒風味は和風料理にも合うのでは」「八幡浜の新たな料理メニューとして期待できる」など、今後の活用拡大に繋がる意見が活発に出された。

○今回、鱧とのコラボ料理は具体化できなかったが、飲食店からはメニュー開発を進めていくとの返答もあり、当室は地元消費者や実需者への認知度向上とともに、フィンガーライムの活用方法についても検討し、需要の拡大を図る。

フィンガーライムと鱧料理とのコラボを検討

農産園芸課　高度普及推進グループ

■さといもの優良種芋の確保に向けた技術検討会の開催と貯蔵試験の開始

○高度普及推進グループは 12 月 24 日、宇和島市三間町のさといも種芋を貯蔵する現地において、県下でさといもを担当する普及指導員等による種芋生産に係る技術検討会を開催した。

○会では、現在の南予地区における種芋の栽培及び貯蔵状況等を報告するとともに、優良種芋の確保に向けた意見交換を行った。

○当グループでは、会の結果を踏まえ、種芋生産に適した栽培及び産地や貯蔵条件等を明らかにするため、さといもの生産に取り組む農業法人の協力を得てプレハブ貯蔵庫を改造し、種芋収穫後の予措や貯蔵時の温度、湿度等に関する貯蔵試験を開始。複数の栽培条件や予措条件におかれたさといもを一定条件下で保管し、貯蔵中の芋重変化や腐敗率及び定植後の生産力等を確認することとした。

○当グループでは、優良種芋の生産、貯蔵技術の確立を通して、県下全域が連携したさといも産地の競争力強化を推進する。

さといも担当普及指導員との現地検討会（宇和島市）

貯蔵試験中の状況確認（大洲市）

■「ひめの凜」生産拡大に向け作物調査研究会を開催

○高度普及推進グループは 12 月 23 日、農林水産研究所で、各普及拠点の作物担当者や研究員等 35 人を対象に令和２年度第３回作物調査研究会を開催。

○当グループからは、調査結果を基に令和２年産「ひめの凜」の収量・食味の傾向、穂肥施肥量と収量・食味に関する試験の結果を報告。また、県内外の食味コンクール等で高い評価を受けている生産者について、栽培環境（標高、用水の温度等）や栽植密度、中干し以降の水管理等が食味や根の活性に影響している等の分析結果を報告した。

○各普及拠点からは、若手職員を中心に行った「ひめの凜」の収量と食味品質調査の結果について報告があり、多収で良食味のほ場は適切な中干管理により過剰な籾数とならず養分を無駄なく利用できたこと、低収ほ場は肥料不足や根傷みによる粒張りの悪さが要因であること等の考察があった。

○農林水産研究所からは今年度の「ひめの凜」に係る試験内容の中間報告と、県下の玄米サンプルの比較展示が行われた。

○当グループでは、今年得られた知見を基に、来年以降モデル農家等に対し食味コンクール等の上位入賞を目指すための栽培指導を各拠点と行い、高品質な「ひめの凜」栽培のロールモデルとすることを目指す。

調査内容を報告する若手職員

良食味栽培に係る報告内容の一部

■(株)源吉兆庵向け加工用もも園で新たな地中かん水システムを導入したモデル実証を開始

○高度普及推進グループは、(株)源吉兆庵向け加工用ももの生産拡大を支援するため今年10月に松野町で新たに造成したモデル園で、12月22日、かん水システムの動作確認後に1年生苗木を定植し、早期成園化に向けた栽培実証を開始した。

○当モデル園は、点滴かん水チューブを通した暗渠パイプを畝中に埋設し、深層域での給水と通気性の向上や長雨等による余剰水の排水を可能とする新たな地中かん水システムにより、より深い位置への根域拡大と樹勢強化等を狙ったもの。

○当日は、少ない水量（約500ℓ/10a）でも深層域の土壌を十分に湿らせることができ、水源の確保が難しい園地でも高いかん水効果が得られること等を確認した。

○当グループは、引き続き、導入した技術が根域や樹冠の拡大に及ぼす有効性を実証することで、加工用ももの早期成園化および安定生産技術を確立し、更なる生産拡大を支援していく。

栽培を開始したモデル園

地中かん水による土壌の湿潤状況

■果樹担当若手普及職員の技術力向上に向けて

○高度普及推進グループは、12 月 14 日、中予地域で第４回普及指導員果樹調査研究会を開催。若手普及指導員等 24 名が参加し、「甘平」の根群分布の調査方法と「普及組織先導型革新的技術導入事業」を活用した「紅プリンセス」の水田転換園での根域制限栽培槽の施工について現地研修を実施した。

○「甘平」の裂果が少ないとされる優良園では、根群の分布状況を確認。当グループからは、小細根が地下深く（地表から 15～50cm 付近）まで発達し、生育期間を通して潅水による土壌水分の吸水が安定し水分ストレスが掛かり難くなることで、裂果の発生が少ないとする中間報告を行った。

○また、「紅プリンセス」の実証モデル園では、当グループから「紅プリンセス」（中晩柑類）に対応した従来よりも大型の根域制限栽培槽の設置に伴う防根シートの敷設、排水対策や根域への酸素供給を目的とした通気性を有するパイプの設置方法等を報告した。

○当グループでは、引き続き若手普及指導員等の技術力向上を図るために、果樹調査研究会での調査研究活動や普及組織先導型革新的技術導入事業等による革新技術の導入事例を活用した研修等を実施し、高度な生産技術や知見の習得を支援する。

「甘平」優良園での現地検討

「紅プリンセス」実証モデル園での現地研修

■さくらひめ現地講習会において、閉鎖型育苗システムでの育苗の試験について説明

○高度普及推進グループは、さくらひめの現地講習会を中予地区 12 月 16 日（参加者 16 人）、東予地区 22 日（20 人）、南予地区 23 日（11 人）で開催した。

○会では当グループが、農林水産研究所で夏期にクーラー室で育苗した苗が、慣行苗よりも１番花の収穫時期が約 12 日早く、花の品質のバラツキが極端に少なかったことを確認できたこと等を報告した。

○また、当グループは、LED 人工光を用いた閉鎖型育苗システムを活用したこれまで以上の生産力の高い苗の生産により、例年収穫時期が遅延し収穫できていない３月～４月の需要期の出荷を目指す実証計画を説明した。

○今後、当グループはさくらひめの収益力向上を図るため、３月から農業法人の協力を得て閉鎖型育苗システムを自作する予定で、９月の定植期までに良質苗が供給できるよう育苗実証を行う。

12 月 11 日　左：慣行苗　右：クーラー苗

現地講習会（東予地区）の様子

■■■ 情報の問合せ先一覧表 ■■■

文中略称	正式機関名	所在地および連絡先
東予	東予地方局産業経済部 産業振興課	西条市丹原町池田 1611 TEL:0898－68－7322 FAX:0898－68－3056
四国中央	東予地方局産業経済部 産業振興課地域農業育成室 四国中央農業指導班	四国中央市中之庄町 1684-4 TEL:0896－23－2394 FAX:0896－24－3697
今治	東予地方局産業経済部 今治支局 地域農業育成室・産地戦略推進室	今治市旭町 1-4-9 TEL:0898－23－2570 FAX:0898－22－9724
しまなみ	東予地方局産業経済部 今治支局地域農業育成室 しまなみ農業指導班	今治市伯方町木浦甲 4637-3 TEL:0897－72－2325 FAX:0897－72－1912
中予	中予地方局産業経済部 産業振興課	松山市北持田町 132 TEL:089－909－8762 FAX:089－909－8395
久万高原	中予地方局産業経済部 産業振興課地域農業育成室 久万高原農業指導班	上浮穴郡久万高原町入野 263 TEL:0892－21－0314 FAX:0892－21－2592
伊予	中予地方局産業経済部 産業振興課地域農業育成室 伊予農業指導班	伊予市市場 127-1 TEL:089－982－0477 FAX:089－983－2313
南予	南予地方局産業経済部 産業振興課	宇和島市天神町 7-1 TEL:0895－22－5211 FAX:0895－22－1881
鬼北	南予地方局産業経済部 産業振興課地域農業育成室 鬼北農業指導班	北宇和郡鬼北町興野々1880 TEL:0895－45－0037 FAX:0895－45－3152
愛南	南予地方局産業経済部 産業振興課地域農業育成室 愛南農業指導班	南宇和郡愛南町城辺甲 2420 TEL:0895－72－0149 FAX:0895－73－0319
八幡浜	南予地方局産業経済部 八幡浜支局 地域農業育成室・産地戦略推進室	八幡浜市北浜 1-3-37 TEL:0894－23－0163 FAX:0894－23－1853
大洲	南予地方局産業経済部 八幡浜支局地域農業育成室 大洲農業指導班	大洲市東大洲 174 TEL:0893－24－4125 FAX:0893－24－5284
西予	南予地方局産業経済部 八幡浜支局地域農業育成室 西予農業指導班	西予市宇和町卯之町 3-434 TEL:0894－62－0407 FAX:0894－62－5543